

頓智小僧

宮原晃一郎

ひかし或山寺の和尚さんが一人の小僧を使つてをりました。この小僧は大變賢い者で、なんでもよく仕事をしますから、和尚さんは可愛がつてをりました。ところが、どういふわけか肝心のお經を讀むこ

とが、ひどくまづいので、それだけはいつも和尚さんから叱られてをります。或時、和尚さんがこのこととて散々小言を申しました。――
「坊さんがお經を讀むことが下手では、どうすることも出来やしない。お前は下手な癖になるだけお經を讀まない工夫ばかりしてゐるが、それぢや立派な

坊さんにはなれないぞ。」
すると小僧はまじめな顔をして答へました。――
「讀みたくないのじやありません。又讀めないのもありません。たゞこゝしてお經が讀めないやうになつてゐるのです。」

んで、毎朝早く小僧を、馬を川へ洗ひにやつた後で爐の灰の中に埋めて、焼いて、獨りてこつそりとたべてをりました。小僧はそれをちやんと知つてをりました。

「それは又どういふわけだ。」
「ごらんなさい。あの通りこゝのお堂が歪んでをります。歪んだお堂の中に入れて、どうして正しいお經が讀めるものぢやございません。」
和尚さんは小僧の頓智な答へにびつくりしてしまひました。

二

さうするうちに正月になりました。お寺のことですから、澤山餅をついて、佛前や神前などにお供へをしました。小僧もいくらか貰つてたべました。けれども和尚さんは澤山あるその残りを皆しまひ込

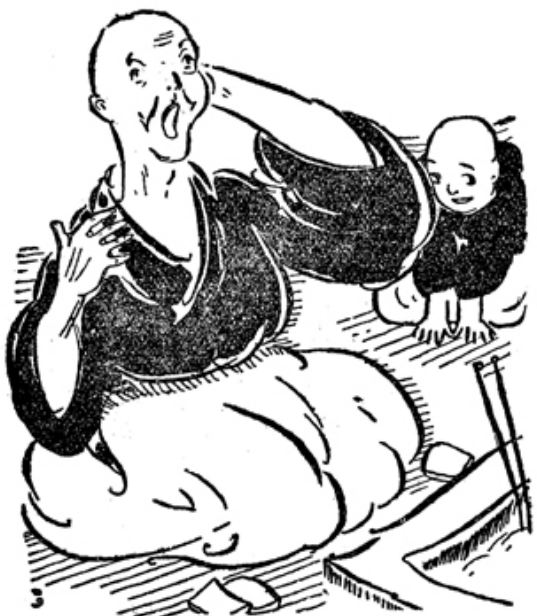
「よし〜。今に私が和尚さんをギヤンと言はしてやるから。」と、小僧はそつと赤い舌を出してゐました。
或朝、小僧は馬を川へつれて行つて、いつもよりか早く洗つてしまひ、歸つて来て、かげの方から、そつと覗いてゐました。和尚さんは、そんなことは少しも知りませんから、例のとほり餅を爐の灰にたくさん埋めました。そのうちに餅は火の熱で、だん／＼膨れだして、うまさうになりまして、和尚さんは一つ灰の中から出して、灰を拂ひ落すつもりで、掌にのせて、パチ／＼と叩きますと、小僧はここだとばかり、
「はい、お呼びでございますか。」と、大きな聲を立



て、飛び込んでまわりました。和尚さんは、あわてて餅を懐へ入れると相憎く肌身にひつゝいたので熱いの熱くないのつて、和尚さん目を黒にして、「あッ熱つツ……火——火の子がとんで来い、熱い。」小僧は、をかしいのを、がまんして、「お呼びでございましたか?」
「いや、呼びはしないよ。呼びはしない。だがお前は馬を川につれて行つたのか。」
「はい参りました。」
「でも餘り早かつたが、よく洗つてやつたか。」
「はい——それはもうその何で……その今朝は、馬がどうしたことだか、馬鹿に元氣がよろしうございまして、どん／＼と駆け出して、とう／＼手綱を私の手から引き離して、逃げてしまひました。」
「逃げた。それは大變だ。」
「まつたく大變なことで——何しろえらい勢ひで、川からかう——。」と、小僧は爐の中の火箸を取り上

げ、灰の上に、すうつと一本筋をひきました。
「逃げまして、こゝを曲つて——おやこゝに餅が一つあつた。」小僧はさつきちやんと見て置いて餅を火箸でつゝき出しました。
「うん。」和尚は仕方がないから首を縦に振りました

「その餅はお前にやるつもりで焼いてあつたのだ。」
「へい、どうもありがたう。」
小僧はむしやくとたべてをります。
「それから馬はどうした。」と、和尚さまは氣にかゝるからあとを聞きます。小僧は又火箸を取り上げ、



「それから一足に百間も飛ぶやうな勢ひで川の岸の山の方へかう走つて——おや又こゝに餅があつた。」
「あゝ、それもお前にやる。それから、馬はどうした。誰か押へたか。」小僧は、その餅をゆる／＼とたべて、も一度火箸を取つて、
「それから、馬も餘り走つて疲れたと見え少し遅くなつて三四郎が家の木樞の垣のそばを、こつちへかう——おや、又こゝに餅があつた。」和尚さんは小僧に「一ばい喰はされたことを知つて閉口しました。」
「よし／＼焼いてある餅は皆お前にやるよ。もう馬の逃げた道を灰に描く事はいらぬ。たゞ馬は誰かが押へたか通じて了つたかそれを早く言ひなさい。」
「はい——それはもう押へたどころではございません。ちやんと既に繋いでございませす。——ウンこりやうまい餅だ。あゝ甘／＼。」
和尚さんは、小僧の才智のすぐれたのに、舌を捲いて驚いてしまひました。